

日本細菌学会 関東支部ニュース

第6号

第58回日本細菌学会関東支部総会を開催するにあたって

総会長 緒方幸雄



既にご承知のことと存じますが、表記総会を今秋10月15日(木)と16日(金)の2日間に亘り、野口英世記念館講堂において開催致します。

会員の方から出題頂いた演題数は現在総数25件で、例年のように医学、薬学、獣医学の各分野からのご発表が両日にございます。

今回は一般演題と都合によりシンポジウムを行わずに特別講演を2題、それぞれの道の大家にご出場をお願い申し上げました。

第1日は東京都衛生研究所々長の大橋誠博士による「東南アジアにおける腸管系感染症の現状」と云う演題で御講演を承ります。申し上げる迄もなく博士は腸管系感染症について広範囲の御研究を一貫して今日まで続けられておられ、その中から今回は特に上記表題を取り上げて頂きました。博士は毎年のように東南アジアにおける感染症の実態調査のリーダーとして、また現地に出向され研究調査員を指導されるなど、現地での予防対策に、わが国への輸入防止策に活躍されておられます。最新情報を基に東南アジアの現状ならびに予防対策についても言及して下さるものと存じます。

第2日は実験動物中央研究所々長の野村達次博士による「モデル動物の現況と将来の展望」と云うテーマで北里研究所の合田朗博士を座長に御講演をされます。動物実験の基本を説かれ、例えばヒトに発現する病態を動物にも発現するようにヒトDNA遺伝子を動物に導入し、その

病態の解明を動物レベルで行なうこと、あるいはHVJ汚染の危惧のないHVJ感染抵抗性動物の改良や日和見感染菌の同定や免疫との関係を解明する目的に用いることのできる動物の改良など、現時点そして将来への疾病の解明に適したモデル動物について永年の経験を生かされた夢を現実のレベルへ移されたまた移されることをお話し下さいます。またわが国でも問題として取り上げられはじめた動物の福祉について、日常動物を手にかけている会員にとって今後の動物の使い方についての福祉の面からの指針も承られるものと存じます。

昨年評議会の御推薦により木村支部長から名誉ある支部総会々長の御下命を承り、微力ながら目下よき活発な総会が開催されますよう努力致しております。何卒よろしく御援助の程承り度くお願い申し上げますと共に当日の御参加を心よりお待ち申し上げます。

第57回日本細菌学会関東支部総会を開催して

総会長 金井 興 美

62年6日8日、第57回支部総会を野口英世記念会館で開催した。数日來の猛暑にもかかわらず、200名をはるかに超える会員の参加を得て盛会であったし、それに「面白かった」とのご感想を多々いただいて、企画側としてはほっとした思いであった。

前期総会の慣例により、シンポジウムのみで運営し、午前は「生物製剤開発における新しい発想」、午後は「病原微生物の進化と人類」をテーマとし、それぞれは5演題で構成された。前者は病気の制御を目的とする現実的な問題であり、後者は「自然」を理解したいという意味で、微生物の進化、免疫系の進化の立場から、人類における感染症の由来、変遷について地球レベルで考えてみようという企画したものである。

極端に次元の異なるこれら2つのテーマにもかかわらず、午前と午後とで参加会員の顔ぶれはほとんど変更がなく、しかも会場は常に満席に近かった。また、解説的、あるいは啓蒙的内容のためか、会場ロビーの方の人影はむしろ稀れであった。予定したそれぞれ10分の休憩時間を返上して進行調整にふりむけたが、質疑応答の活発さを反映したものであった。

ワクチン、抗生物質の開発において、現在大きな限界にぶつかっているとすれば、それを克服するためには、発想の転換と新しい生物技術の利用とが必要であろう。午前における5つの演題はいずれもそうした努力がみなされている最中のものであるが、それらの試みを現実に人体に使用可能のものにするには、なお数々の壁をのりきる工夫が要求されるように理解された。

演者は根路銘国昭、小島朝人、渡辺治雄、上原至雅、鈴木日出夫の各氏で、お仕事の内容といい、プレゼンテーションの明快さといい、それぞれの領域の推進者としての貫録を示すものであった。

午後の「病原微生物の進化と人類」は、細菌学会としても初めての取りあげ方であり、企画者としての私にもはじめ危惧の念がなかったわけではない。

しかし、「古細菌の生化学的研究」、「細菌の毒素遺伝子の起源と進化」、「免疫系の由来と進化」から「B型肝炎ウイルスからみたウイルスと人間との自然史」の話題に移り、最後は「伝染病と文明の変遷」に至る一連のお話をお聞きして、私たちはそこに不連続ながらひとつの筋道を発見し、それなりの相互関係を感じる事ができたように思った。時には実験室の日常性から離れて微生物や人間を考え、そこからまた私たちの現実に戻るといった精神的過程が、このシンポジウムの4時間足らずの中でできたと思えば、望外の喜びである。大島泰郎、山本達男、村松繁、西岡久寿弥、福見秀雄の各氏を演者とする大型シンポジウムであるが、お話の軽妙さもあって、飽きることのない楽しい時間であった。

総会終了後2時間にわたる懇談会を会場内レストラン「ガーナ」で開催した。これも誠に盛会であった。

さいごに本学会開催に当ってご援助下さった木村支部会長はじめ支部評議員の諸先生に心から感謝いたします。

日米医学協力研究会コレラ専門部会 (通称日米コレラ) 22年のあゆみ

1965年1月にホノルルでNIH主催のコレラ研究会議が開催された。1946、7年頃を境として文明諸国ではコレラという病気は忘れられたものとなり、その研究もぐっと下火になっていたが、1961年頃からインドネシアを中心として

東邦大学医学部微生物学教室 神 中 寛
広がりがつあったコレラの流行がきっかけで始まった新しい研究の結果がその頃から登場してきたのであった。

一方その少し前に日米両国政府間で、日米が協力してアジア全住民の健康と福祉のための計

画、すなわち「日米医学協力計画」を実施する取り決めが出来ていて、その主題の一つとしてコレラも選ばれていた。正式の部会の発足はその年の10月であり、それ以後毎年日米持ち回りで合同シンポジウムを開催しているが実際には上記のシンポジウムが第一回の会議であったと了解されている。その後22年、部会長は最初の福見秀雄先生から、武谷健二、桑原章吾、大友信也諸先生に引き継がれ、5代目として私がこの4月からお引き受けすることになった。米国側でも初代のDr. Carpenter 以後現在の Dr. Sack まで4人の部会長を数える。研究者の層を考えると米国側が圧倒的に多く、我が方は常に押されぎみとはいいながら、それでも或る時は協力し、或る時は対抗した時にはリードしながらコレラと細菌性腸管感染症の研究を進めてきた。

最初の会議の内容は、疫学的観察、ワクチンの再評価、検査法、フェージ、病原性と動物モデル、消化管の分泌および吸収機構、症状と治療などで、コレラ以外の菌では腸炎ビブリオが顔を出している。Finkelstein のコレラ毒素はまだ模索中で、下痢についても輸液の基礎はほぼ固まっていたが、その機構についてはまだナトリウムポンプ説が提出された程度であった。コレラ毒素の単離と精製は1969年の第5回のシンポジウムで発表され、同じ時にサイクリックAMP も登場した。1970年にはNAG と大腸菌の毒素が、1973年には毒素のAB構造とそのレセプターが発表された。コレラ毒素のアデニル酸シクラーゼ活性化機構はその後数年かかって明らかにされ、大腸菌定着因子の報告、コレラ

および大腸菌毒素の一次構造と全遺伝子の構造の解明と続いてゆく。その間、トキシノイドワクチンが無効であることが解ったり、生菌ワクチンに思いも依らない副作用があったり、ということもあったが、昨年に至って死菌とBサブユニットの混合ワクチンがコレラの予防に相当の効果があることが見いだされた。というのがこの22年間に発表された主なトピックスであろう。

研究が進むにつれ、コレラは決して孤立した特別の疾患ではないこともわかり、大腸菌やビブリオ類だけでなく、赤痢菌もカンピロバクターも、エルシニアも我々の研究対象になっているので、「コレラ」という部会名も今年から「関連下痢疾患」という語句を伴って使用されることになりそうである。通常の学会や研究会でもなく、科研費による研究班とも性格が一寸違うというのがこのグループで、もちろん会費を頂くわけにはいかず、支給される限られた研究費、運営費の中で出来るだけ自由に（目的さえ部会のテーマに適合していれば）やって頂くことになっている。

正式には5名の部会員と20名の研究員で成立しているが部外の方を招待することもあり、「共同研究員」として流動的ではあるが、かなり多数の方の参加があることを申し添えたい。以前はシンポジウムの記録を無償で配布していたが、現在は費用の点でそれが出来なくなり、KTK という出版社に委託しているので有料になってしまった。ただモダンメディアとJ. Infect. Dis. にその概要が毎回掲載されているので、御覧になったかたも多いであろう。

第二回細菌の病原性とその分子遺伝学研究会の報告

中谷 林太郎（東京医歯大）

昭和60年に第一回を開催しました“細菌の病原性とその分子遺伝学”研究会の第二回研究会は、主題を“サルモネラ”として次のような次第で開催いたしましたところ、大変多数の御参加を得て、きわめて有意義な成果を納めることができました。木村貞夫関東支部長の御理解を得、また関東支部からご援助を賜りましたことをここに厚く御礼申し上げます。

第三回は、寺脇良郎教授（信州大学医学部）を世話人として、本年7月24日（金）の午後10時に“Pseudomonas”を主題として7題の研究が紹介される運びとなっています。

今後も日本細菌学会、とくに関東支部会のご支援を心からお願いいたします。

第二回研究会次第

開催期日：昭和61年7月25日（金） 午後 1:30-6:00

会 場：東京医科歯科大学講堂

開会の挨拶 第二回世話人 中谷林太郎（東京医歯大）

- | 演者（所属） | 演題 |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1. 村田三紗子（都衛生局） | サルモネラ症の臨床と疫学 |
| 座長 松原 義雄（都立豊島病院） | |
| 2. 堀内 三吉（東京医歯大・医） | ヒト由来サルモネラのプラスミド |
| 座長 橋本 一（群馬大・医） | |
| 3. 寺門 誠致（家畜衛試） | <i>S. dublin</i> の病原性プラスミド |
| 座長 岡村 登（公衆衛生院） | |
| 事務連絡 吉川昌之介（東大医科研） | |
| 4. 三瀬 勝利（国立衛試） | サルモネラの制限酵素 |
| 座長 寺脇 良郎（信州大・医） | |
| 5. 中村 明子（予 研） | チフス菌・パラチフス菌のフェージ型別 |
| 座長 吉川昌之介（東大医科研） | |
| 6. 藪内 英子（岐阜大・医） | <i>Salmonella typhi</i> の細胞感染 |
| 座長 竹田 美文（東大医科研） | |
| 7. 中谷林太郎（東京医歯大） | 総 括 |
| 閉会の挨拶 第三回世話人 寺脇 良郎（信州大・医） | |

タイ国立衛生研究所プロジェクトの紹介として

金 井 興 美

この3月31日、予研を定年退官した私は6月15日以降、日本国際協力事業団（JICA）の委嘱をうけてバンコクに常駐し、タイ国立衛生研究所プロジェクトにおける日本人専門家のチームリーダーとして働くことになった。これについて紹介文を書くようにという支部評議員会のおすすめにもって小文をもってお答えすることにしたい。

わが国の経済発展に伴って開発途上国に対する援助は年毎に拡大し、国家予算がきびしく抑制されている中で、JICAの予算は国防費とともに増加をつづけている。JICAの実施する援助事業のうち、技術協力と建物・施設等の無償供与とは主要な援助形態であるが、最近はこの2つがこみになったプロジェクトが、全体のほぼ半分の件数になってきている。

タイ国立衛生研究所プロジェクトもそうした形の医療協力のひとつであって、総経費は40億円に近づく程の大型のものである。タイ側の要請を受けたJICAは、予研元所長の村田良介博士と阪大微研の名誉教授深井孝之助博士を中心

とする国内委員会を作って対応し、事前調査のうちのこのプロジェクトを発足させた。

以来2年近くが経過するが、研究所庁舎の方はすでに完成し、この5月下旬、タイ王女を迎えて開所式が行なわれた。この庁舎は研究所施設として先進国のどこに出しても見劣りのしない行き届いたものであって、RI施設、動物舎、バイオハザード施設なども最新の配慮が取入れられている。機能と形態とが見事に整理され、豊かな中庭をもつ左右対称の安定感のあるレイアウトで構成された全景は、熱帯地区にマッチした外装をもってほとんど芸術的ですからある。

研究所の機能としては、わが国の予研、国立衛試、公衆衛生院の性格を部分的に総合したような印象をうけるが、本質的にはタイにおけるCentral Reference Laboratoryの役割を演ずるものと私は理解し、また期待している。

過去1年半、多くの短期専門家が現地へ赴いて技術移転に貢献し、また、タイからは研修員が来日して技術修得に努力してきた。すでに学

集 会 案 内

国際フロンティア研究システム・フローラ研究公開フォーラム (第8回・理研腸内フローラシンポジウム)

“腸内フローラの研究方法論”

日 時 昭和62年11月27日(金) 10:00~17:00
場 所 ヤクルトホール(JR線・地下鉄 新橋駅下車2分)
主 催 理化学研究所 国際フロンティア研究システムフローラ研究チーム
後 援 ヤクルト
問合せ先 理化学研究所国際フロンティアフローラ研究チーム
電話 (0484) 62-1111 内線 5042

プログラム

- はじめに ○光岡 知足(東大・農, 理研)
1. 腸内フローラの構成バランスの検索法とその省力化 ○辨野 義己(理研)
 2. 核酸プローブの腸内菌同定への応用 ○原澤 亮(宮崎大・農)
 3. 腸内菌のプラスミドの検索法 ○渡辺 次男, 熊田 浩美, 笹本 正枝, 門多真理子(ヤクルト中研)
 4. 腸内菌の代謝活性の測定法 ○鈴木 邦夫(理研)
 5. 腸内フローラの構成機構の解析法 ○伊藤喜久治(理研)
 6. 腸内フローラ研究におけるノトバイオートの有用性 ○水谷 武夫(理研)
 7. 腸内菌による免疫応答の解析法(I) ○露木重雄, 川島拓司(森永乳業・生物科学研究所) 山崎省二, 上田雄幹(国立公衆衛生院)
 8. 腸内菌による免疫反応の解析法(II) ○池 郁生(理研)
 9. 乳酸菌の遺伝子操作法 ○今本 文男(理研)
 10. 腸内菌の非タンパク態窒素利用能の検索法 ○高橋満里子(共立女子大)

会発表の形でその成果を表現されている研修員もおり、一方、ワクチンの自国生産能力の養成効果として、日脳ワクチンの最初のロットが生産され、その品質がわが国の生物製剤基準をクリアするまでになった。

私が赴任してこれまで空席であったチームリーダーがうまり、さらには1年以上滞在する長期専門家も数名確保され得る状況になってきた。ひきつづき強力な国内委員会の援助も得られるので、微力な私でもどうにかつとまるかと考えてこの役をお引受けした次第である。技術援助の主体は感染であるので、ひろく細菌学会員の皆様のご協力をお願いしたいと考え、原稿依頼に応じたものである。

最後に現地の住所をお知らせして、ご挨拶としたい。

K. Kanai
Japanese Expert Room: 3rd Floor
c/o National Institute of Health,
Department of Medical Sciences,
Ministry of Public Health,
88/7 Gp. 4 Soi Bamrasnaradura Hospital,
Trad Khuan District, Amphur Muang,
Nonthaburi, Thailand

第三回「細菌の病原性とその分子遺伝学」 研究会プログラム

開催期日：昭和62年7月24日（金） 午後1:30～5:30

場 所：東京医科歯科大学講堂（5号館4階） 東京都文京区湯島1-5-45

| 演 者（所属） | 演 題 |
|--------------------|---|
| 1. 松本頼樹（信州大，医） | 緑膿菌の病原因子と遺伝解析 |
| 2. 景山 真（三菱化成生命研） | ビオシンの遺伝学 |
| 3. 中江太治（東海大，総合医学研） | 緑膿菌外膜の果たす薬剤自然耐性の役割 |
| 4. 平山寿哉（東大医科研） | 緑膿菌ロイコシジンの作用機構 |
| 5. 林 哲也（信州大，医） | 緑膿菌ロイコシジンの精製と遺伝子クローニングへのアプローチ |
| 6. 井上幸江（山口大，医） | <i>Pseudomonas putida</i> のトルエン分解系の調節機構 |
| 7. 松本頼樹（信州大，医） | <i>Pseudomonas cepacia</i> のgene bank 作成と遺伝解析 |

事務局：〒108 東京都港区白金台4-6-1
東京大学医科学研究所，細菌研究部

研究会委員 吉川昌之介
幹 事 笹川 千尋

第6回支部評議員会記事

日時：昭和62年5月30日（土）

議題：

1. 第57回支部総会準備状況（金井総会長）
2. 第58回支部総会準備状況（緒方総会長）
3. 各小委員会報告
4. その他：講演抄録の支部保存について
(イ) 支部総会長は支部に講演抄録を送付する，(ロ) 支部長は他支部に講演抄録を送付する，(ハ) 支部長は「講演抄録の保存」について次期支部長に申し送る。

◇編集後記◇

山口編集委員長が中国へ出張中のため，小生が編集を引き受けることになり，泥縄で仕上げたのであまり見映えのよくないものになった。自分で試みて，改めて委員長のご苦勞に感謝するものである。

さて本号には学会関係の記事のほか，神中教授の日米コレラ専門部会のあゆみについての記事，金井先生のタイ国立衛研の紹介をのせた。

わが国にはない病気の研究が主であるが，会員諸氏の参考になれば幸いである。

第2回の細菌の病原性とその分子遺伝学研究会の報告と，第3回分はアナウンスの積りであったが，すでに終了してしまったので，そのプログラムを掲載した。また本号には第58回学会長の写真を掲載した。会長の顔を確認するためにも，学会に多数の会員諸兄の参加をお願いする次第である。（S. K.）

日本細菌学会
関東支部ニュース
第6号
(1987.9.4)

編集・発行：日本細菌学会関東支部
〒173 東京都板橋区加賀2-11-1
帝京大学医学部細菌学教室
☎ 03-964-1211